

NPO法人

第40号 冬

芦安ファンクラブ通信

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ

事務局 南アルプス市芦安芦倉1589-8 大滝要造

TEL 055-288-2531 FAX 055-288-2533

URL=http://catv.nus.ne.jp/~afc3193/

E-mail=rantan@blue.ocn.jp

「最後の紅葉まつり」?

開催される

十月七日(日)南アルプス市芦安紅葉祭りが芦安小学校校庭で行われた。昨年より少し短い準備期間であったが、昨年並みの規模と内容を企画することが出来た。しかし今回の祭りは大変意味深い。前々から、芦安におけるせつかくの地域祭りは春の新緑の頃にしたほうがよいという意見集約がやつとまとまり、次回は芦安の山々が新緑に染まる頃、地域祭りを実施することになったからだ。従って、今回の祭りは紅葉まつりとしては最後ということになる。

会場を広く使え、ステージを大きくしたなどの効果により、お祭りが一回り大きくなったようだった。司会は昨年度大変好評だった芦安中学生生徒にお願いして、フレッシュな幕開けとなった。

オープニングは中学生の夜叉神太鼓が鳴り響き、セレモニーでの市長及び関係者の挨拶の後、小学生の「ワッショイ」の踊りが続いた。健康と生きがいづくり講座の高齢者による合唱は昨年より大勢になり、指導者のご苦労が伺われる。出店は、郷土工芸伝承コーナーでは、わらぞうりや竹細工を体験してもらい、食品提供では恒例の手打ちそばや、やきそばの販売が並ぶ。今回のチャレンジ食品として学校関係者の山賊なべと、小ジャガのみそころがしがあった。怪しげな名前の山賊なべは猪や鹿の肉をふんだんに使っている。味噌ころがしは懐かしい郷土

料理でもあり、早々完売となってしまった。はたこの会では飲料品、食協の皆さんは寿司類、清月さんではお汁粉、商工会では農産物の販売に協力してくれ、フオークダンス部とチロル学園ではバザーを開いてくれた。今回、新しく加わってくれた芦安郵便局と環境省南アルプス保護官事務所もそれぞれの活動内容を掲示して、盛り上げてくれた。鹿調査用カメラの体験コーナーでは鹿になった人達が群れをなしていた。

信玄ロックの演舞やフオークダンス部の円舞はいつ見ても華やかで美しい。今年は足元が平だからしつかり踊れたとのことだった。数年前の紅葉まつりに出演した時はあまりの寒さに観客も演奏者も大変だった「ジャズマーケット」の皆さんも充実したジャズ演奏を披露してくれた。処々に顔を出したオヤジギャグは演奏ほどの拍手は見当たらなかった。アンデスの民族音楽「グルーポ・バホ」の皆さんは、AFCの登山教室でお願いした以来であるが、益々低音に磨きをかけ、異様な世界に観客を引き込み、楽しませてくれた。ステージバックに張った北岳のシート画像の岩場に不思議なほど溶け込んでいた。芦安ファンクラブとしては、市のフェスタで好評だったクライミング体験ボードを会場に組立て大勢の子供達に楽しんでもらった。それとガイド付の紅葉狩りツアーは全便満席でしかも増発するほどの盛況だった。地域の名所を解説しながらのツアーは祭りが変わっても形を変えて残して生きたいものだ。昨年より

も豪華になった抽選商品は最後まで残って楽しんでくれた人へのプレゼントだが、すでに帰った人の抽選番号が繰り返され、次回に向けて対応策の検討が求められる。

早朝より、入場者や退場者への対応をしてくれた安協の皆さんには、変則な駐車場への案内等で大変なご苦労をいただき、スムーズな車両移動が出来たことに感謝したい。次回へ向けて駐車場の確保や誘導もしつかり検討しなければならない。

役九百人ほどの参加者が終日入れ替わり楽しんでくれたが、いつもながら出店者や出演者の皆さんの献身的な協力と行政の支援によってこの小さな地域祭りが継続できることに心から感謝し、次回の楽しい祭りへの励みにしたい。

芦安地域祭り実行委員会

事務局 清水准一



アンナプルナ山麓トレッキング&ネパールの山村及び釈迦生誕地を訪ねて

花岡利幸

(1) 旅程

11月15日羽田発バンコク(dayroom)

航空機 TG677

11月16日カトマンズ泊

航空機 TG319

17日ポカラを経てナヤプル

航空機、自動車(移動)

ナヤプル〜ピンダンティ泊

①トレッキング(移動)

18日ガンドルン泊

②トレッキング(移動)

19日ダダパニ泊

③トレッキング(移動)

20日ゴレパニ泊

④トレッキング(移動)

21日ブーンヒルを経てシーカ泊

⑤トレッキング(移動)

22日タトパニ泊

⑥トレッキング(移動)

23日ベニを経てポカラ泊

自動車(移動)

24日ポカラ泊

自動車(ポカラ滞在国内観光)

25日アレバンジャンを経てドリラマ村泊

自動車(移動)

26日アレバンジャンを経てパイラワ泊

自動車(移動)

27日ルンビニを経てパイラワ空港からカトマンズ泊

自動車、航空機(移動)

28日カトマンズ泊

自動車(カトマンズ滞在国内観光)

11月29日バンコックを経て 航空機(機内泊)

自動車(市内観光)、航空機 TG320

30日成田着

航空機

航空機 TG640

(2) トレッキング

ヒマラヤトレッキングと言うと、皆さん高い山に登ると想像しがちで、私も実際そのところがどうなのか分からなかったのですが、行ってみて分かりました。

ネパールはインド半島の付け根の奥に東西に長方形に横たわる国でその北側の辺をヒマラヤ山脈が走っています。インド半島が地球表面の動きで、何億年の間に北に押し上げられて、土地が隆起しヒマラヤ山脈ができました。そこは国の南側の長辺の付近の海拔100m位の平地から北側の8000m級の山々が連なるところまで100km位しかない、急峻地形の山並みの国です。

何も資源のないネパールは美しいヒマラヤを観光産業にするために、海拔6000mまでの山歩きをトレッキング(高山山麓の山歩き)と名付け、それ以上の山行を登山と名付けて区別し、トレッキングの観光産業で経済を潤そうとしました。トレッキングと言っても5000m級の山に行くような登山に相当するコース、山脈の中の小山脈の周辺を一周するようなきついサーキットコース、3000m級の山麓に行く中級コース、1000m級の初心コースといろいろ用意されています。

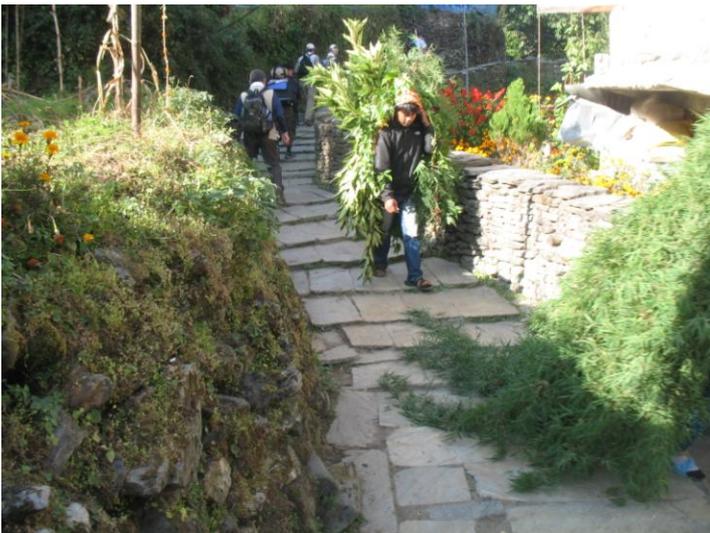
私たちが行ったコースはアンナプルナ山(8000m級)周辺のトレッキングの中級コース(年間2万人の通過者)で、ポカラ(POKHARA)というネパール中央にある都市(820m)から約1週間、一日平均6時間くらいの山歩きで、3000m位のところまで行って、アンナプルナ(Annapurna)やダウラギリ(Dhaulagiri)の8000mの山々を遠くから眺めて来るというものでした。普通4日くらいで行くところをゆっくり行き、その上ポーターが荷物を担いでくれますから、けっこう高いところまで行くとはいえ、実質は困難を伴わない快適な大名旅行でした。



(3) 旅行計画

それができる仕掛けは以下のようです。

私たちは4人で行ったのですが、首都カトマンズ (KATHMANDU) までの切符を自分たちが用意して、ネパール (NEPAL) へ入ってからは一切を信用のおける地元の案内人に頼む、という旅行計画を立てました。現在、日本の1人当たり経済力を3万とすれば、ネパールのそれは300ですから、同じお金を日本の旅行社に払って観光者が受け取るサービスと、ネパールの地元で観光者が受け取るサービスは各段の違いがあるはずですが、日本人の払う1人何万円かの費用は、地元の彼等にとって相当高額なお金です。それを直接地元へ払えば地元にとって大きな収益を得るはずですが、私たちは他では得ることのできない豊かな旅を安あがりできます。彼等にはできる限りのサービスをしてくれます。そのとき、旅行計画は「信用のおける地元のマネジャー (旅行業者)」との間にその関係が得られるという条件の下で成立します。



4人の中の1人の小学校時代のお友達に垣見さんという方がいて、その人が日本からの寄付金を募ってネパールに行って、貧しい村に学校を建てたり水道を引いたりしてネパールのために働いています。彼は地元で絶大な信用があって、彼をネパール側からサポートしている人の中から紹介してくれた地元案内人 (会社経営者で日本留学経験者、ネパールの経済人) が私たちのマネジャーになってくれました。

そんな関係ですからトレッキングでゴレパニ

(GHOREPANI) からタトパニ (TATOPANI) へコースを変えたり、2800m級の見渡す限りの山を覆う巨木のジャクナゲ (Lali Gurans) の森が春先に、山一面が花で埋め尽くされ、散った花びらでつくる赤い絨毯 (red carpet way) の山道を山行する

極楽浄土の世界の話の話を聞いたり、村人の生活道路でもある山道のところどころに設けられているソウタラ (Choutara) と呼ばれる休み場施設についての話を聞いたり、途中コースを変えて釈迦の生誕地探訪を入れてもらったり、ポカラの国際山岳博物館のように現地で知った情報によりその施設を訪ねたり、ヒンズー教の旧都バクタプル (BHAKTAPUR) やヒンズー寺院パシュパティナートを訪れて沐浴や火葬の様子を現場で観たりすることもできました。

(4) ネパール国山村と釈迦生誕地訪問

トレッキングが終わって、2日間位を垣見さんが住んでいる未開発地を村歩きする計画があって、ネパール人の生活にも触れることができました。といってもそこへ行くのにまた1日がかかりで山奥へ自動車でもガタガタ揺られながら行かなければいけない。その後のカトマンズへの帰都の途中にお釈迦様の生誕地ルンビニ (LUMBINI) があることを知って、2日の村歩きを1日に減らしてもらってそこを訪ねました。これまでお釈迦様はインドで生まれたとばかり思っていたのですが、生誕地がネパール地籍であることを初めて知りました。

ここ、ルンビニでヒマラヤのこちら側に発祥した仏教がヒマラヤ越えてチベットにわたりチベット仏教に、そして中国、朝鮮、日本と伝えられた大乘仏教を、今まで逆に見てチベット仏教まで視野に入れていたのが、インド側から見られて感慨がありました。仏教の源、ヒンズー教を勉強しなければいけないと思いました。これら異文化に接したことは私の視野を広めるのに大いに役立ちました。



平成二十二年年度

「自然公園関係功労者

環境大臣表彰」

受賞の報告と御礼

NPO法人芦安ファンクラブ

清水 准一

昨年秋、受賞内定情報を山梨県警と県みどり自然課からいただき、まさかそんな…と半信半疑でいたところ、環境省と鹿児島県から正式な書面と日程が届き、受賞の現実に驚いた。しかし、十一月十三日？(AFC研修予定日)そして鹿児島県…ですか？恐る々妻に同伴でどうかと言うと「私は振り回されたくありませんからね」といつもブレイキ役の妻からは冷たい反応。でも、開催場所が我国最初の国立公園指定地である鹿児島県霧島市というところ、大河ドラマ「福山龍馬伝」を週三回欠かさず観ている妻は、高千穂峰に強く反応を示し、「そこに登れるなら」の条件付で無事、二人で鹿児島へ向かえることになった。

数日して、鹿児島県環境林務自然保護課の南さん(洒落ではありません)から、大会の一環である翌日のワークショップで南アルプスの魅力と活動状況の話をして欲しいとの連絡があり、熟慮の末「高千穂峰登山」時間確保の条件付で引き受けた。

十一月十二日 実は二人とも鹿児島は初めてで、空港から霧島温泉丸尾しか停車しない直通バスに乗ってしまい、また前泊の宿までタクシーで引返す始末。静かな高原地帯が広がり、遠

くには低い山々が連なっている。丸尾の硫黄の匂いに閉口していた妻はこの雰囲気にほっとしたようだ。宿は貸切露天風呂がいくつもあり、落ち着いて温泉を楽しめる。鹿児島には黒が付く美味しいものがいっぱいあるそうだ。黒豚、黒牛、黒酢、黒糖、黒焼酎などが味わえると思うと

楽しみだ。とりあえず夕食に出された黒豚、黒牛他と黒焼酎をいただいて明日に備える。

十一月十三日 国際音楽祭を行われるという「みやまコンセール」で行われる午後からの式典、レセプションのために午前十時頃からリハーサルする念の入れよう、大会に懸ける地元の熱意が感じられる。南さんの案内で会場に入ると環境省の染谷課長さんや退職したという阿部所長さんにも会うことが出来、顔見知りの方がいたのにも驚いた。

今回の受賞者はそれぞれに地元の国立公園において自然保護や適正利用に貢献している方々ばかりで、どの方に聞いても「家業は二の次」のような活動をされているようだ。同伴した奥さん同士での会話ははずんでいるようで、ほっとする。式典には松本環境大臣はもちろん、主賓として高円の宮妃が出席され華やかな大会が開かれた。受賞代表者は最も遠くから出席された日光国立公園の高田さん、御礼は地元霧島屋久国立公園の山下さんが堂々と振舞われた。鹿児島県知事と霧島市長の歓迎の挨拶は、地域の自然や観光を自信に満ちた方言で話し、訪

れる人々を満喫させようとする熱い思いが伝えられ、「こうであるべき」の姿勢が感じられた。霧島市長は龍馬の大ファンで龍馬が姉に送った手紙は一字一句暗記しているとのことだった。

霧島ホテルで行なわれたレセプションもきちんとした形で始まり、宮妃への対応はもちろん飲食行動も丁寧に制約された。芦安で行われた「ライチョウ会議」のレセプション等とは大

違いで、宮妃にお酌をして…などは考えられない環境で始まった。一人一人が氏名を名乗り、その功績を渡辺大臣官房審議官が大臣と宮妃に説明をし、各テーブルを廻り始めた。儀式的な説明に物足りないそぶりを見せると、宮妃から後でゆっくり廻ってお話を聞きます、と述べられた。宮妃が全テーブルを廻るまで注視していることも

注文された。その間、大量の黒、黒、黒、等の料理はもちろん、焼酎もお預け。一通りの儀式が終り我々のテーブルに宮妃がおいでになられた。数年前のライチョウ会議のことを気にかけてくれた様子で、その後ライチョウはどうですか？と心配していただいた。みんなで一生涯保護に取り組み、その後新しい繁殖箇所も見つかった。います、と説明すると、隣の中部山岳国立公園から「うちにはライチョウはいっぱいいますよ」と能天気な助言が付き、その場はしらけ、焼酎の味比べに選に突入する。見ると儀式に関係ない妻達はもうとっくに美食をついばんでいるではないか、たくましい限

りである。松本大臣にCOP10での活躍ぶりに水を向けるとまんざらではないような笑顔が返ってきた。

あつという間のレセプションは宮妃の退場でお開きになり、結局消化不良の夕食になってしまったホテル宿泊者はこれでは寝れないとぼやいていた。夕食付だった我々はゆつくり霧島料理と焼酎味比べを楽しんだが、あの大量に残ったであろう料理が気にはなった。

十一月十四日 朝七時三十分、ホテルまで鹿児島県自然保護課の池田さんがワークショップ出席の私を迎えに来てくれ、鹿児島市内までの約五分ほどの間、周辺観光の話や桜島の北岳の解説をしながら送ってくれた。目前に見る桜島は大きく、岩肌は荒々しく圧倒的な迫力で迎えてくれた。

幕末の英雄達が、ある者はこの山に誓い、ある者はこの山に癒され、この山が時代の随所で主役になる風景が納得できる。ワークショップでは霧島屋久国立公園の関係者約百人が参加し、内容は「霧島ジオパーク」のことや「公園の活動や楽しさの再発見」についてのものであった。ここで南アルプスの話もなんか変な感じもしないではなかったがせっかくなので準備してきたプレゼンがあるのだから、それをもとに話させてもらった。十五分の予定が四十分以上にもなってしまう冷や汗ものだった。

さあ、高千穂峰へどう行って、何に乗ってなんて考えていたら、池田さんが、今日は一日我々のガイドをするよ

うになつていきます、というではないか。信じられないサプライズに二人とも感謝感激である。高千穂河原までの道中で龍馬達が入ったという塩浸り温泉、霧島最高地にある白い湯の新湯温泉の説明や、硫黄ガスが吹き出ているまさに活火山の形相を見せる岩肌などを見ながら、あつという間に駐車場に着いた。高千穂峰上部はガスに隠れていたが青空が見え隠れして十分な登山日和だ。



男盛りの池田さんは人気者であちこちで声がかかり、こんな人にガイドをしてもらえると思うと申し訳なきさいっぱいであるが、妻はご機嫌のようだ。道々で焼酎の好みや、体育会系でサッカーのコーチをしているなどの話は伺ったが、山に対するコメントはいまひとつ切れが悪い。泊りで重いザック

を背負って山に行くことが信じられないというのだ。最も周囲には山で泊まるような環境がないかもしれないが、地域性の違いとは恐ろしいものだ。登山口を少し歩くと噴火で消失した霧島神社の跡地があり、噴火のすさまじさを垣間見る。その周辺にわずかに残っていたミヤマキリシマの数株に合えた。少しあせた花色ではあったが、山肌一色に咲き誇る満開のそれを想像させるには十分だった。樹林帯の中では南国の樹木や小鳥の熱心な解説を聞きながら登って行ったが、いつの間にか家族的な話になっていった。いよいよガラガラした急斜面にかかり、ズルズルした岩礫を避けて固定岩へスタンスを選ぶ。

上部からすでに登頂を終えた人々が降りてくる。下りも石車に乗ると大変だ。一坂登ると稜線にでて、覗き込む火口が下のほうに美しい。周囲も火山連山が並び、南アルプスにはない穏やかな火山帯の山容だ。やや狭くなった稜線辺りでは、ここでの龍馬伝撮影時の苦労話などを楽しく聞き、やはり地元ガイドの有り難さを痛感した。少し下ったところに鳥居があり、ここで参拝をし、いよいよ高千穂峰を目指す。周辺には歪化したミヤマキリシマの株が這うように、斜面をつかみ込むように自生していた。満開時はさぞ見事な布絵だろう。

転在する露岩をよけるようにつづら折に登ると、山頂には逆錐を祀った岩丘がよく観る画像と同じに現れた。ここが歴史に有名な…この印象は歴史

史を舞台に引き出せる観光地の最も得意とする強みだろうな。うらやましくも思いながら三人で代わる代わるシャッターを切った。三座同定盤からの韓国岳連山が綺麗に見え、ここでも記念撮影をする。下山は岩場にルートを取り、慎重に高千穂河原に下りる。後で聞いたことだが、宮妃も午前中に高千穂河原に御寄りになったようだ。帰りは霧島神社へ寄ってもらい、参拝したり、龍馬の手紙のレプリカを読んだり、黄砂で赤くなった西陽に染まりながらホテルに送ってもらった。

夕食は洋食だ。しかし焼酎にこだわりの、ウエイトレスの姉さんにいろいろ出してもらおう。お客さんはシヨウチュウバーの方がよかったのでは…そんな視線を感じながらの夕食だった。

十一月十五日 今日日は帰りに向かう。午後のフライトに少し時間があるから、ホテルからタクシーであちこち寄り道をしながら空港に向かう。犬飼滝で豪快な水爆を上から観て、和気神社で珍しい白猪と所縁を学び、百年以上の歴史を刻む嘉例川駅に寄った。ちょうど数分程で機関車「はやとの風」号が立ち寄り、シャッターを切りまくる。列車の内部は木製の内装が美しく、停車中のみ構内者にもカフェが営業されていた。

こんななゆったりとした時間と景色はいいねえ、岳南鉄道に親しんでいた妻はご満悦。市内のデイスカウトショップでお土産を選ぶ。まず、はずせないのは、ガイドの池田さんご推薦の「イサニシ



甲府富士屋ホテルにおいて「受賞祝賀会」を行う

芦安ファンクラブ研修記

渡辺典美

今回の芦安ファンクラブ研修旅行は、伊豆大島でした。数多くの見聞と体験をしましたので、その内から二件についてお話し致します。

1【三原山から絶景を眺める】

熱海港からジェット船で四十五分、四十六キロメートルを隔てた伊豆大島に上陸し、その日の内に標高七五八メートルの三原山火山の水蒸気噴き出すカルデラ外輪山を歩き、「富士を見るなら大島に来たれ、三保や龍華寺の比ではない」と井上田了が『伊豆大島紀行』の中で伊豆の天城連峰と相模の海を前に配した秀麗富士山を絶賛している風景に出合いました。冬晴れのこの日に絶景を眺めた私は、井上翁に言葉足りないもう一つがあることを発見したのです。

それは、『平家物語、海道下り』の一節に「北に遠ざかって雪白き山あり、問えば甲斐の白峰といふ」と語られている情景を実証するがごとくに、甲斐駒から赤石岳まで長く延びた南アルプスの純白な稜線が富士の遠くに眺められたのです。空気の澄んだ冬晴れの日に現れる雪白き連山こそが秀麗富士を引き立てる二枚目役者を演じていたのです。『日本百名山』

深田久弥著では、この南アルプス最高峰の北岳について

「どおだおれは、といったよ
うな、抜きん出て人の眼を惹こうとする
ところが無い。奇矯な形態で、その存在
を誇ろうとするところもない。それでい
て高い気品をそなえている。いつも前山
のうしろに、つつましく、しかし凛とし
た気概をもって立っている。奥ゆかしい
山である。――
と記しています。

そつえば井上翁は明治四十四年十一月十二日に来島したという事なので南アルプスが現れたこの景色は見ていなかったのかもしれない。南アルプスの魅力を探る私としては、大それたことながらちよつといい気分になってしまいました。

2【踊り子舞うみなとや旅館】

波浮港から石積階段を登ると中腹に「みなとや旅館」があり、今は資料館になっていて座敷で伊豆の踊り子が舞っていました。小説『伊豆の踊子』川端康成著では、踊り子家族がこの波浮港の芝居小屋に住み、お座敷がかかればみなとや旅館やこの坂を登った甚の丸邸等で踊りを披露したという。

この映画は戦前戦後六回も上映され、時々の主演女優はその後名女優の冠を得ることになる。資料館で代々の主演俳優

の展示写真を見る中で吉永小百合に出逢うと、我が齢の老いを忘れ映画の場面に入ってしまい若き日の高校生にタイムスリップし、胸の高まりを抑えることができなくなってしまう。

坂を登り甚の丸邸や灯台岬を散策した後は波止場に下り「みなと寿し」での風食となる。飲み物は日本酒でぬるめの燗を注文すると、なぜか酔いは早回りでしまい至福の時を過ごしました。

「歳たけてまた越ゆべし友と三原山

富士の遠くに甲斐が峰

波浮の港は踊り子の舞う

命なりけりその睦月三日月のころ」

岩井友子

日本列島は、例年になく大雪、カラカラと二分される気候の中、伊豆大島は、椿・桜の花が咲き温暖な様子が窺える。

三原山からは水蒸気の煙が湧き上り、土に触ると温かく地球の息吹を感じる。近くには白くて大きな富士山、遠くには峰峰に雪を連ねた南アルプスの山々が青空に牙え渡る。眼下には日差しでキラキラ輝く海が広がっていて、改めて自然の美しさに感動した。

二日目は志摩を散策。波浮港、港屋旅館、旅館前の町並み、甚の丸邸、麦焼酎の蔵元などを見学する。当時の風情が残り、なつかしいかおりが私には感じた。

二日間の旅も終り、帰路のバスの車窓からは茜色に染まる空に山々が、いつまでも私を現実にはもどしてくれなかった。

井口 功

椿の林を下ると荒涼とした砂礫の原となった。冬枯れの原は森林限界を越えた高山の雰囲気を感じながら志摩の山旅を楽しんだ。



柳原 久

大島三原山登山は、風が強く吹いていて大変辛かったです。先輩方に負けないように、自分なりに頑張って登りました。今回三回目のチャレンジでしたが、いかな名でない貴重な体験をすることができとても良かったと思います。

芦安ファンクラブの研修旅行は、いろいろな面で勉強になりました。来年もまた参加したいと思います。幹事の杉山御夫妻ご苦労様でした。本当にありがとうございました。

森本聖治

一月三十日朝四時三十分芦安出発、熱海港から高速船で大島へ。三原山は雪で白くなっていました。三十八年前頃に来たことがあり暖かいイメージでしたが、ホテルを出て山頂に向かう途中から風が強くなりとても寒かったです。頑張って歩いて来ました。

穂坂二郎

大島を四十年ぶりに訪ねましたが、昭和六十一年の三原山噴火により山は昔の面影はありませんでしたが、海の青さや椿の赤に心が和みました。

思ったより寒く大変でしたが、楽しい二日間を過ごす事が出来、幹事さんに感謝です。

瀧水 毅

今は昔四十年前、若い二人は意に思い立って竹芝桟橋から船底に揺られて大島に着いた。夜明けを待って、浜で焼いていた伊勢エビに飛びつき、二人で分けて食へながら眺めた海。トビウオが舞うのを見て驚きしたアングも今はすっかりお婆ちゃん。懐かしい海を堪能して来ました。幹事さん有り難う。

塩沢久仙

野口雨情の「波浮港」の句碑近くの、美味しいコロッケを味わいながら登った。「文学に散歩道」東京に近いとはいえその数の多さに驚き、しかもバラエティーに富んだ句碑が迎えてくれる・・・山の文学者の言葉を借りて南アルプスの落ち着いた自然の中に、こんなことが出来ないかと思ひ、大町桂月の句碑を後にした。

奥山かがみ

今回の旅で一歩に残ったのは相模灘の向こうに南アルプスの白い峰が見えた事です。山が見えたと言って喜び。山や自然の話をすれば尽きない、そんな仲間にも恵まれ山にゆける。

こんな幸せな事は無いと思えた三原山でした。

宮下重晴

椿咲く、大島三原山へ再度訪れる事が出来た前回は九月でしたので、登山道の脇には花もみられたが今回は雪の在る厳しい山を体験でき、ファンクラブの皆さんと楽しく同行出来たことに感謝し、次の研修旅行を今から楽しみにしている宮爺です。

小林 賢

椿も咲く南の暖かい島という印象から一転、宿のホームページを見ると温泉と料理ばかりに眼が行き、新着情報を見過していた。何と山頂に雪が！情報提供の重要性を痛感した旅でした。

清水 准一

その昔、伊豆大島には消防団研修旅行で行ったことがあるようだったが、定かではない。

その行程のほとんどを飲むことに費やしていたからだ。今回もV.F.O.の酒豪達が頑張っていた様子だったが、やはり酒は飲むほどに酔うようだ。

「貯めたなら 何年酔える 噴火口」

今回は同行カメラマンに徹した。紺碧の冬の海、斜光を投げる遠い冬の陽、閉ざされた空間からの満点の星、艶やかな椿

その輝きに決して劣るとも優らない女性群…、こんな景色を切り取りたくて歩けたことが楽しかった。最上のコンピの幹事さん御疲れさん、そしてありがとうございました。

望月泰孝

今回の親睦旅行では、次のように大変貴重な体験ができ、一生の思い出になりました。

・深夜放送で、サッカーのアジア選手権、日本優勝の観戦をしたために寝不足だったこと。

・甲府では、この冬、積雪ゼロなのに、暖かい気候の三原山に雪があったこと。
・バスの中で、まだ暗い日の出前に宴会をしたこと。

・露天風呂で、日の出を迎えたこと。
・真冬に、お花見「椿」ができたこと。
・幹事の杉山さんに感謝申し上げます。



平成23年度 登山教室のご案内



**南アルプス芦安ファンクラブの登山教室は
四季の高山の匂をお届けます。**

南アルプスのふところに暮らしている私たちだからこそ、
山のいちばんいいときをお届けすることができるのです。

コース一覧

回数	開催日/集合時間	目的地 / コース説明	集合場所/登山口	難易度
	参加費		宿泊	特殊な装備
① 第26回	5月21日(土)22日(日) 集合 午前7時00分	隠れた名山と残雪の鳳凰山 ・・辻山 大崖頭山 薬師岳 観音岳 高谷山・・	芦安山岳館/夜叉神の森	中級者向き
	19,000円	鳳凰山へのルートにありながら、通過してしまいがちな隠れた名山にスポットを当てます。	南御室小屋	軽アイゼン
② 観察会	6月25日(土)26日(日) 集合 午前11時30分	氷河期の忘れ物を訪ねて ・・開山祭とキタダケソウ観察会・・	野呂川広河原イソノメ-ヨシセツク/広河原	上級者向き 大樺沢雪溪の登下 降あり。要雪上歩行 経験
	12,000円	キタダケソウ繁殖地(北岳南東斜面) ※北岳山頂には行きません	白根御池小屋	8本爪以上アイゼン・ピッケル
③ 第27回	7月13日(水)14日(木) 集合 午前5時00分	百花繚乱 お花畑にご案内します ・・北岳・・	芦安山岳館/広河原	中級者向き 体力必要 標高 1,700mの高度差
	19,000円	北岳 大樺沢右俣コース	北岳肩の小屋	必要なし
④ 第28回	10月1日(土)2日(日) 集合 午後1時00分	南アルプスの名峰を望む展望台、早川尾根 ・・紅葉と展望を楽しむ静かな山旅・・	芦安山岳館/北沢峠	中級者向き
	19,000円	栗沢山 アサヨ峰 広河原峠	北沢駒仙小屋	必要なし

※参加費は、宿泊費・2日目昼食代・保険料・乗合バス代金を含んでいます。

みんなで楽しみながら学んで、登って、山の素晴らしさを実感しましょう。

「NPO 芦安ファンクラブ」(代表 花岡利幸)は、南アルプス市芦安山岳館との共催で登山教室を開催しています。

登山教室では、実践を通して、安全で楽しい登山をするための技術や知識を学んでいます。

参加者は一人でもグループでも受け付けています。お申込みをお待ちしています。

申し込み・問い合わせ

■申し込み・問い合わせ先

◆電話かメールでお問合せください。

◆芦安山岳館 〒400-0241 山梨県南アルプス市芦安芦倉1570番地

◆Tel 055(288)2125 Fax 055(288)2162

◆<http://catv.nus.ne.jp/~afc3193/>

■申込方法 所定の申込用紙にご記入の上、FAX又はメールでお申込ください。トラブル回避のため電話での申込は受け付けません。

◆申込用紙 ワード形式 PDF形式

■前泊を希望される方は、ご相談ください。

■主催 NPO 芦安ファンクラブ/南アルプス市芦安山岳館 ■後援 山梨県山岳連盟/NPO 日本高山植物保護協会